

外伝 その2

《多摩川の扇状地と崖線の成り立ち》

多摩川の左岸側（東京都側）の武蔵野台地は、扇状地上に形成された複数の段丘（台地）から構成され、その境に国分寺崖線（がいせん）、立川崖線などの崖線があります。右岸側（神奈川県側）には段丘がありません。この特異な地形の成り立ちを、地質年代に沿って概観します。

まず、大氷河の時代といわれる更新世（約258～1万年前）のこと、氷期と間氷期が繰り返されます。東京湾は、海水準が変動し、海面が下がったときは東京湾が陸地化し、上がったときは関東の低平地が海没しています。

この時代に、多摩川は、山地から土砂を吐き出し、東京都から埼玉県に広大な扇状地を造成していくとともに、海域には河口テラスを造成していきました。下末吉面といわれる台地（新宿がある淀橋台地など）は、海域でできた台地であり、更新世中期にできたものです。

次に、最終氷期の前の間氷期（約10～7万年前）にできたのが、武蔵野面となる扇状地です。この扇状地が形成された後、海水準変動と2回の地盤変動が起ります。

1回目は、扇状地末端が約30m隆起、或いは、海水準が約30m低下します。これによって、多摩川は、扇状地の扇頂から海に到る河床の勾配を安定させるべく河岸を削り取ります。これによってできたのが国分寺崖線です。

2回目は、多摩川扇状地の扇頂の近くの左岸側（東京側）が隆起します。この隆起に対して、多摩川は安定河床に戻るべく河岸を削り取ります。これによってできたのが立川断層です。

そして、最終氷期（約7～1万年前）後にできたのが、蛇行を繰り返しながら形成した沖積層の平地部です。

このように、多摩川の本流は、更新世中期以降、国分寺崖線沿い→立川崖線沿い→現在の平地部へと流路を変え、段丘を形成してきました。

現在の多摩川の河道は、戦国時代の1589年（天正17）、1590年（天正18）に発生した連年洪水により、流れが北側へ変わったときのものです。（注1）実はその時、天下を決める大事件が起こります。それは次号でご紹介。

注1：この流路変更は、地盤変動が関係していると推察します。1589年（天正17）3月21日、東海地方で地震がありました。被害は、4年前の天正地震（注2）ほどではありませんが、静岡県、神奈川県域を中心に、多数の家屋が倒壊したと記録されています。

さらに、ちょうど1年後の1590年（天正18）3月21日、房総半島で地震がありました。安房では、2m隆起し、干潟が3kmに渡って露出したと記録されていますから、相当な規模だったと推察されます。

これらの地震は、フィリピン海プレートが引き起こしたと考えられ、これによって神奈川側の地盤高が変化し、1589年には下流において、1590年には中流において、北へ流れを変えたと推察します。

注2：1586年（天正13）1月18日、近畿・北陸・東海に大被害をもたらした大地震。この地震により、同年8月8日、木曾川が大洪水に見舞われ、それまで流れていた境川から現在の河道に流路を変えました。これは、前年におきた天正地震により、左右岸沿の土地の隆起や沈降が影響していると推察します。

写真が、①段丘イメージ図（tadapota.com 掲載図）、②武蔵野台と2つの崖線（スーパー地形、カシミール3Dより）、③-1 多摩川流域を構成する下末吉層③-2 武蔵野層③-3 立川層③-4 沖積層（geocities.jp 「武蔵野台地と野川公園」 掲載資料）、④沖積層に残る多摩川中流部の旧河道（国土地理院治水地形分類図）



